じんだい

第72号　2023.7.20（木）

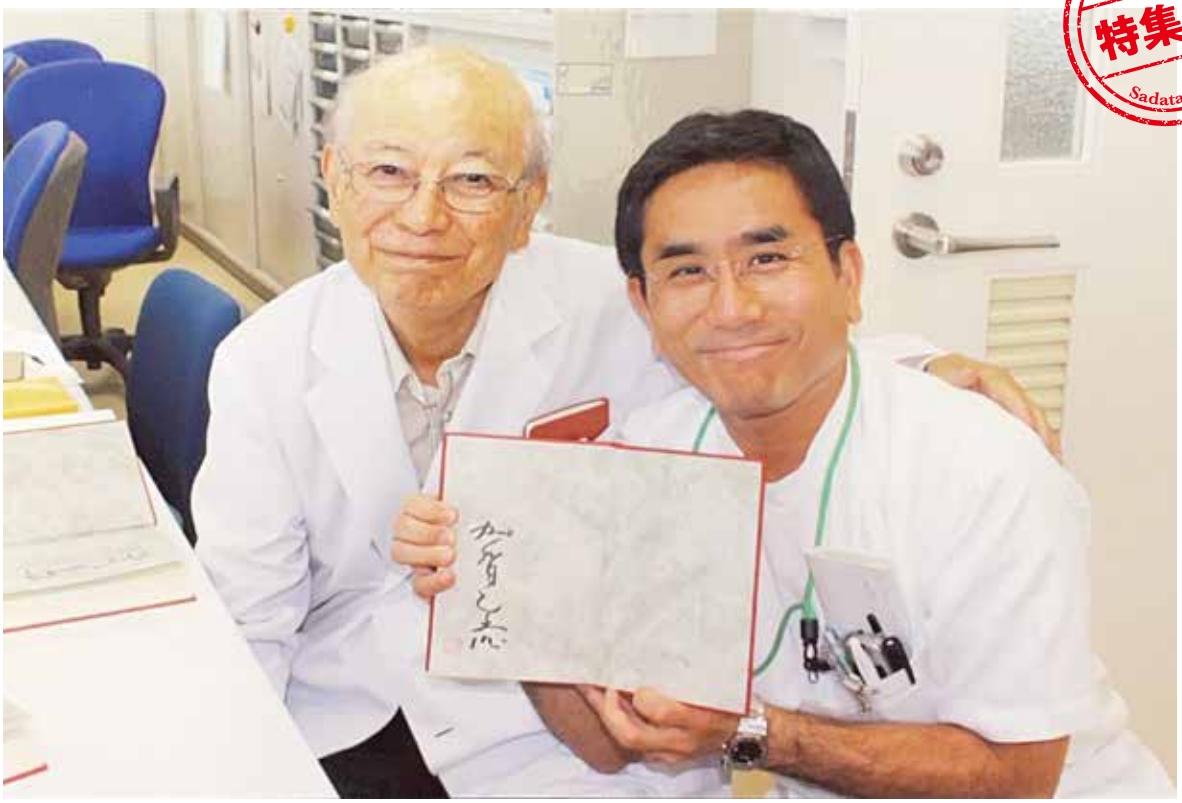
発行：医療法人社団　欣助会　吉祥寺病院

調布市深大寺北町4-17-1　☎042-482-9151
URL　www.kichijoji-hospital.com

基本理念

患者様やご家族の側に立った医療
患者様の社会復帰を目指す医療
全職員相互の力を発揮できる医療

Memorial 特集号 Sadataka Kogi



不滅の思い出（詳しくは4ページへ）

Contents

年表・著作一覧…… 1
Photo commémorative …… 3
吉祥寺病院と小木先生…… 5
小木先生と歩んだ半世紀…… 6
小木先生とのランチタイム…… 9
小木先生を想う…… 10
小木先生から教えて頂いた家族支援…… 10
ベレー帽のおじさん…… 11
“命”と向き合って …… 12
人に寄り添い続けた小木先生…… 13
小木先生の思い出…… 14
湿原のころ…… 15
本能寺からお玉ヶ池へ ～その⑯～ …… 17
小木先生の思い出…… 20
未見の彼…… 20
新聞記事のご紹介…… 21
外来担当表 / 当院略図 / 編集後記 …… 23

1929年4月22日－2023年1月12日

小木（こぎ） 貞孝（さだたか）

生涯、臨床に立ちながら執筆と
医学研究に注力した小木貞孝＝加賀乙彦先生。
精神科医としての知見を土台に、
生きることについて思索を深め続けたその軌跡を辿ります。
なお、ここでは敢えて本名の「おぎ」ではなく
「こぎ」と表記させていただいております。

1929 東京府東京市芝区三田に生まれる。本名は「小木貞孝」

1942 東京府立第六中学校入学。すでに新潮社の世界文学全集を繰り返し熟読し、作家への素地を培っていた

1943 100倍の倍率を突破して名古屋陸軍幼年学校に入学するも、1945年の終戦を受けキャリアチェンジを迫られ医師の道へ

1949 3月、旧制都立高校理科卒業
4月、東京大学医学部入学

1953 東京大学医学部卒業

1957 留学のため渡仏
交通事故で九死に一生を得る

1960 フランスから帰国し医学博士号取得

1964 立原正秋主催の同人誌『犀』に参加

1965 東京医科歯科大学犯罪心理学研究室助教授に就任

1967 長編『フランドルの冬』を刊行。第一章を太宰治賞に応募し、候補作として『展望』に掲載されるが、その後全体を刊行、芸術選奨新人賞を受賞

1968 短編「くさびら譚」で第59回芥川賞候補になる

1973 『帰らざる夏』で谷崎潤一郎賞を受賞

1979 文筆に専念。『宣告』で日本文学大賞受賞

1986 『湿原』で大佛次郎賞受賞

1987 58歳。クリスマスに妻とカトリックの洗礼を受ける。洗礼名は『ルカ』

1998 『永遠の都』で第48回芸術選奨文部大臣賞受賞

2000 日本芸術院会員

2005 旭日中綬章受章

2007 文京区区民栄誉賞

2011 文化功労者

2012 『雲の都』（全5巻完結）により第66回毎日出版文化賞特別賞を受賞

2016 第5回歴史時代作家クラブ賞・特別功労賞

2023 召天

著作一覧

『フランドルの冬』（筑摩書房 1967年、のち新潮文庫、角川文庫）
『風と死者』（筑摩書房 1969年、のち角川文庫）
『文学と狂気』（筑摩書房 1971年）
『荒地を旅する者たち』（新潮社 1971年）
『夢見草』（筑摩書房 1972年、のち角川文庫）
『帰らざる夏』（講談社 1973年、のち講談社文庫、文芸文庫）
『ドストエフスキイ』（中公新書 1973年）
『虚妄としての戦後』（筑摩書房 1974年）
『異郷』（集英社 1974年、のち集英社文庫）
『現代若者気質』（講談社現代新書 1974年）
『死刑囚と無期囚の心理』（小木貞孝名義 金剛出版 1974年）
『あの笑いこけた日々』（角川書店 1975年）
『春秋二題』（沖積舎 1975年）
『黄色い毛糸玉』（角川書店 1976年）
『頭医者事始』（毎日新聞社 1976年、のち講談社文庫）
『日本の長篇小説』（筑摩書房 1976年「日本の10大小説」ちくま学芸文庫）
『仮構としての現代』（講談社 1978年）
『宣告』（新潮社 1979年、のち新潮文庫）
『私の宝箱』（集英社 1979年）
『死刑囚の記録』（中公新書 1980年）
『頭医者青春記』（毎日新聞社 1980年、のち講談社文庫）
『見れば見るほど…』（日本経済新聞社 1980年、のち中公文庫）
『イリエの園にて』（集英社 1980年）
『犯罪』（河出書房新社 1980年、のち河出文庫）
『生きるための幸福論』（講談社現代新書 1980年）
『犯罪ノート』（エッセイ集 潮出版社 1981年、のち文庫）
『作家の生活』（エッセイ集 潮出版社 1982年）
『戦争ノート』（エッセイ集 潮出版社 1982年）
『錨のない船』（講談社 1982年、のち文芸文庫）
『頭医者留学記』（毎日新聞社 1983 のち講談社文庫）
『加賀乙彦短篇小説全集』（全5巻 潮出版社 1984年 - 1985年）
『読書ノート』（エッセイ集 潮出版社 1984年）
『残花』（潮出版社、1984年）
『くさびら譚』（成瀬書房 1984年）
『湿原』（朝日新聞社 1985年、のち新潮文庫）
『フランスの妄想研究』（小木貞孝名義 金剛出版 1985年）
『スケーターワルツ』（筑摩書房 1987年、のちちくま文庫）
『キリスト教への道』（みくに書房 1988年）
「永遠の都」シリーズ
『岐路』（新潮社 1988年「永遠の都」新潮文庫）
『小暗い森』（新潮社 1991年「永遠の都」新潮文庫）
『炎都』（新潮社 1996年「永遠の都」文庫）
（「永遠の都」1-7 新潮文庫は、「岐路」「小暗い森」「炎都」をつなげて改題したもの）
『母なる大地』（潮出版社 1989年）
『ゼロ番区の囚人』（ちくま文庫 1989年）
『ヴィーナスのえくぼ』（中央公論社 1989年 のち中公文庫）
『ある死刑囚との対話』（弘文堂 1990年）
『加賀乙彦評論集』（上下巻 阿部出版 1990年）
『海霧』（潮出版社 1990年 新潮文庫）
『生きている心臓』（講談社 1991年 文庫）
『脳死・尊厳死・人権』（潮出版社 1991年）
『悠久の大河 中国紀行』（潮出版社 1991年）
『私の好きな長編小説』（新潮選書 1993年）
『日本人と宗教』（対談集 潮出版社 1996年）
『生と死と文学』（潮出版社 1996年）
『鴎外と茂吉』（潮出版社 1997年）
『聖書の大地』（日本放送出版協会 1999年）
『高山右近』（講談社 1999年 文庫）
『雲の都』第1-5部（新潮社 2002年 - 2012年）
『夕映えの人』（小学館 2002年）
『ザビエルとその弟子』（講談社 2004年 のち文庫）
『小説家が読むドストエフスキー』（集英社新書 2006年）
『悪魔のささやき』（集英社新書 2006年）
『不幸な国の幸福論』（集英社新書、2009年）
『科学と宗教と死』（集英社新書、2012年）
『加賀乙彦 自伝』（集英社、2013年）
『ああ父よ ああ母よ』（講談社、2013年）
『日本の古典に学びしなやかに生きる』（集英社、2015年）
『殉教者』（講談社、2016年）（ペトロ岐部を描く）
『ある若き死刑囚の生涯』ちくまプリマー新書 2019
『死刑囚の有限と無期囚の無限 精神科医・作家の死刑廃止論』コールサック社, 2019
『妻の死 加賀乙彦自選短編小説集』幻戯書房, 2019
『わたしの芭蕉』講談社, 2020.1

『日本の精神鑑定』福島章, 中田修, 小木貞孝 編集 みすず書房 1973
『死刑囚と無期囚の心理』小木貞孝 著 金剛出版 1974
『フランスの妄想研究』小木貞孝 著 金剛出版 1985

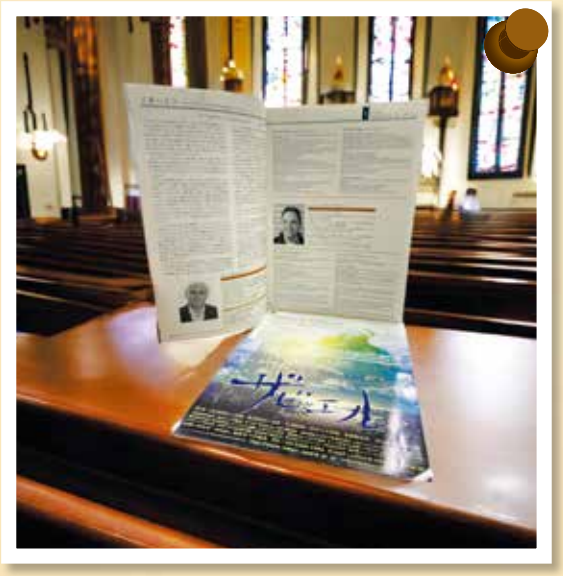
翻訳
『錨のない船【英語】』Riding the east wind
（リービ英雄訳 講談社インターナショナル 1999年）
高山右近（独訳）Kreuz und Schwert: Roman über die Christenverfolgung in Japan
（ラルフ・デーゲン訳 Berlin : Be.bra Verlag, c2006）

アンリ・バリュック『精神病の治療』
高橋宏, 黒川正則, 小木貞孝 共訳 白水社（文庫クセジュ）1956
モーリス・メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』第1
竹内芳郎, 小木貞孝 訳 みすず書房 1967

思い出の写真
Photo commémorative

吉祥寺病院の創立60年を記念して記念誌『60年の歩み』を刊行。《読み物編》《データ・略年表編》《写真集》の三部から成り、小木先生が在籍55年を振り返るエッセイも収録されている

“花水木の落成のあと、病院のＡ棟その他の改築もおこなわれ、吉祥寺病院は美しきとはかくも様相が違ってくるものかと、驚いている。そして、かつて畑と植木屋



小木先生は舞台演出にも積極的に取り組んだ。日西合作オペラ『ザビエル』は日本にキリスト教を伝えたフランシスコ・ザビエルの生誕500年記念事業として、原作・台本加賀乙彦で上演された
（資料：江原由美子先生ご提供）

1999年、
吉祥寺病院を牽引した面々

2011年、文化功労賞に選ばれた小木先生を祝う会を病院スタッフで開催。懐かしい顔ぶれが集まった

食事会にて。前列左が小木先生

い大きな病院になった。55年パート医師として、働いていた私は、最初来たとの庭であった周囲が、まったくの都会の姿になったのに驚いている。”

（『60年の歩み』より、小木貞孝〔作家　加賀乙彦〕寄稿「吉祥寺病院の55年」から引用）

2015年、新潮社から『永遠の都』全7冊セットが刊行された。記念に医局で全冊にサインを認める小木先生

函入りの全巻は今も塚本院長のもとで大切に保管されている

吉祥寺病院と小木先生

理事長・院長　塚本　一

小木貞孝（加賀乙彦）先生は私が1歳の頃より吉祥寺病院へ勤務されていた。

父は東京大学精神科学教室から派遣されていた成瀬浩先生と小木先生を信頼し、色々と相談していたようだ。

父は小木先生について、性格は明るく話をしていてもとても楽しいのに書く小説は暗いと私によく話していた。

小木先生によると『湿原』という小説で吉祥寺病院を舞台にしたと話されていたが、私としては2002年3月に出版された『夕映えの人』のほうが人物や背景など当院が使われていると思う。

『夕映えの人』の主人公小谷四太郎が務める私立精神科病院のオーナー院長の名前が為本銀助（ためもと　ぎんすけ）という名前であるが、私の父の名前は塚本金助（つかもと　きんすけ）である。

また為本銀助の人間描写が

- 病院の差配は副院長にまかせっきりで、なにやら忙しげに外出するのを常としていた。
- 話の合間にしきりに高笑いを挿入しながら自分が入れ歯や虫歯がないことを自慢する。
- なんでも開けっ広げで、強引なワンマン経営で病院をここまで発展させた。
- 陽気で傍若無人で、ずけずけと言いたい放題だった。
- 入れ歯が一つもないのが自慢で年を覚えさせぬ活力に満ちた人であった。

など私の父とそっくりであり、また「銀助が突然亡くなり困りはて為本夫人と息子鉄郎が主人公に相談へいった」ことや舞台となる私立精神科病院は「A棟B棟の2棟構成で300人の入院患者がおり、為本銀助院長が突然亡くなった後労働争議でおおいに揉めていた」ことなど1980年代後半の吉祥寺病院そのものである。

しかし随分違う所もあり、銀助には愛人がおり、その愛人宅近くの路上で倒れた設定になっているが、父金助はそれ程女性にもてず、当院で倒れ杏林大学救命救急センターで亡くなった。またB棟で火事がおこり、その後為本夫人と息子鉄郎が組合や病院経営に嫌気がさし、病院を閉鎖してより収益の上がる賃貸マンションプロジェクトを推し進めるあたりは事実と全く異なる。

小木先生から『夕映えの人』を頂き読んで感想をお伝えすると、事実と嘘をゴチャマゼにして書くのが小説ですからとニヤッと笑って答えていらした。

『夕映えの人』の中で主人公が為本銀助院長のあとをつぎ病院の経営に携わるが、その部分は私から見ると物事が都合良く進み過ぎ現実味が薄い印象を持つ。しかしその事で小木先生の中心にある人柄の良さを再認識できた気がする。

小木先生は明るく大きな目がクルクル動き、茶目っけたっぷりの人柄の良い先生だった。経営などの現実社会のドロドロとした難しい部分とは縁遠かったのかもしれないが、突然大黒柱である父を失いとまどう母と私を親身になって支えてくださり、吉祥寺病院へも愛着をもって60年以上も勤務して下さった。

20年前に『夕映えの人』を読んだ時と比べ私自身が60才を越え再び読むと次の文章が心に響いた。

「斜陽に照り映える物の姿は立体的でもっとも美しく輝かしいんだ。調べてみると夕暮れ前の黄ばんだ日光に照らされた、夕映えの美を日本の古典はちゃんと表現している。色うるわしく、はなやかに、きよげなりとね。夕映え、いとめでたしともいう。苦労を重ね年齢を踏み、いよいよ薄暗い死が迫る年齢になって、きらびやかに生きる。そういう復権の生き方が求められる時代となった。とくに年寄りが増えてくるにつれて、切実になった。

とにかく、ぼくはわびしい六十代は送りたくない。夕映えの人でありたいよ。」

私もこのような60代を送りたいと思う。

長い間吉祥寺病院にご協力下さり本当に有難うございました。

〈追伸〉以前小木先生にどうして加賀乙彦というペンネームにされたのか伺った事がある。小木先生曰くご先祖が加賀藩の出身なので加賀、甲乙丙から乙をとって語呂合わせで彦をつけたとの事だった。

小木先生と歩んだ半世紀

名誉院長　原藤 卓郎

このたび小木先生の急逝をきいて驚き悲しみ、涙が止まらない状態である。

当院に長く務められた先生を偲んで各自の思い出を綴った小雑誌を編集するとのことで私もその一部に参加、先生は余りにも広く、大きく奥深い人間性でとても書きつくせるものではないが先生との長年の私個人とのおつき合を綴ってみたい。

幼少〜青年の頃

小木先生（以下先生）は1929年（昭和4年）東京・三田にて生育、小学校時代5〜6年頃に新潮社の世界文学全集を好んで讀んでいた、とのことで、この好奇心が長じて長篇作家になる素地になったと思われる。近くの中学に入学したが当時男子は軍人となってお国の為につくすことが皆の夢であった。両親のすすめもあって、陸軍幼年学校を受験。100倍の難関を突破して合格。両親は大変喜ばれたとのこと。

その際の口頭試問に「光の7色を述べよ」「赤（セキ）・橙（トウ）・黄（オウ）・緑（リョク）・青（セイ）・藍（ラン）・紫（シ）」と口早に答えたら、試験官はびっくりして、「よし…次…」で合格になった、いい加減ですね！！　と先生にはニニコしてよくこの話をくり返していた。勿論ペーパーテストの点は充分であったでしょうに…。

幼年学校での生活は「帰らざる夏」に詳細に書かれている。「忠君愛国」「滅私奉公」の精神を叩き込まれた。終戦で学校生活は2年で終わったそのあとこの精神生活を脱するのにひどく手間がかかった…と述べられていた。

8月の夏休みには家に帰る予定でいたが、8月15日終戦の混乱に陸軍の一部は一億玉砕、徹底抗戦だとわめき立ったが、上部の命令で中絶となった。『帰らざる夏』のうら若き16歳の主人公は殉死を選び、尊敬する先輩と共に切腹。帰らぬ夏となりました。

こうして生命の尊さ、自由の大切さが作品の中に再々書かれている…。

戦後の混乱に両親は医者になることをすすめた。食べること、住む所は何とかなるが、病は専門家でないと出来ない。戦争で多くの医師が失われた。一人でも多くの医師が必要な時である…と父親にすすめられ（本人は文系に行きたかったが）、都立の高校に編入し1949年卒業し同年4月東京大学医学部に入学、卒業し（医師となって文学の道に少しでも近い）精神科に入局した。

吉祥寺病院との出会い

2年のフランス留学を終えて、東大に帰って来た。1960年、秋元教授の命令（？）で吉祥寺病院にパート医として勤めることになった。

秋元先生からの地図をたよりに来てみると、麦畑の中の一軒家であった。三鷹駅↔調布バスに1時間に1本、バス停から病院までの道は農道で狭く雨の日は長靴をはかないと歩けない。夜は街燈はなく暗いので懐中電燈を持ってないと歩けない…。

病棟は古材を使っての建物で1棟で男女が分かれており患者は大広間でごろごろした生活である。えらい所に来た！　と思っていたが、それが他の病院も行かず今日まで務めてきたのは何故？　…特に良い病院でもない。さりとて特に悪い病院でもない…。院長の金助先生は大声でよく笑い邪気のない人であり、先生方も皆おとなしく、よく勉強し、ナース達もテキパキして元気で明るい雰囲気であった。先生も気ままに仕事が出来た…そんなこんなで長い年月が流れて行ったのでしょう…とのことである。

萌動期

1959年、塚本家に長男一（はじめ）さんが生まれ上二人が娘さんなので院長の喜びは大変なものであった。医局に来ては赤子の話ばかり、笑い乍ら話したりし、又院長宅は病院内にあったため奥さんが一（はじめ）赤ちゃんを抱いて散歩すると、看護婦さんもよって来て皆で抱き合って赤ちゃんが笑うと皆も笑う。私は一人者だから子供はいない。赤ちゃんの抱き方を教わって抱いてみた。柔らかな暖かい命を抱いている様な奇妙な気持ちになった…と先生はニコニコし乍ら感想を述べられた。

先生が来て1年がたった。病院も増築し入院患者80人が150と増し、医師・看護者が不足であった。金助院長が秋元教授に泣きついて…教授から先生にお呼びがあって、医師・看護者の増員を手助けする様にと指示された。先生は丁度その頃アメリカ留学を終えて帰って来た成瀬先生（同級生）に相談し、副

院長に加藤先生を、他医局に若い先生3〜4名、看護婦も婦長級の人一人と付き添いを一人と、先生の東奔西走のおかげで何とか定員をしのぐことが出来た。

病院も忙しく、又、若い人達が多く、皆元気で働いていい病院？になった。ところが2年たった頃副院長の加藤先生が突然辞めることになった。さあ大変だ…と騒いでいる時に秋元教授の紹介で原藤卓郎（私）医師が来ることになった…。私は1964（昭和39年）12月半に病院に行って挨拶をし、正式に翌年1月から務めることになった。

1月になって医局会で歓迎会をして頂いた。その時先生が「枯葉」をフランス語で歌って…やれやれだと云って皆で拍手しなごやかな会であった。——

4月になって加藤副院長に替わって私が副院長となり、皆さんの協力を得ながら何とか病院を支えて来た。

1967年先生の『フランドルの冬』が出版され、翌年、文学賞を受けた。（昭和42年）。急に仕事が増えて上智大学の教授を辞めた。当院のパートも辞めようとしたが外来患者が「是非いて下さい、先生が辞めるなら私死にます」と泣きつく者もいて、また当然私からも是非留まって…とお願いした。先生もそれではと留まることになった。

避暑地へ

家では何かとうるさくて仕事にならぬ、殊に暑くてどこか静かなところがないものか…と云われ、それでは諏訪にある私の実家は小さな宿屋をしています。そこなら今時（9月初め）も涼しくて静かですがどうでしょうかと、それは有り難い…と、私の実家に案内することになった。家の者に前もって事情を説明しておいて3階の一室に案内した…ああここは静かでいい、それに東京に比べて涼しいですね…とのことで暫くいることに決まった。

ところが2〜3日して、だめだ帰ります、と電話があって私もすぐ実家に行ってみた。静かはいいが、線路が近いため汽車（当時は石炭）が通るたびに障子がカタカタ振れて、初めは地震かと思ったがそうでなく汽車による振動と分かった。1時間毎にガタガタされて、気になってだめだ——とのことで、中止。さて困った、父が山の寺はどうかと言われ、成程と思い話をしてみた。山間の谷間の奥に古い禅寺があって、そこなら静かなこと、又涼しいこと請け負います——とのことで一度見に…バスで20分程、寺の入り口のバス停で降りて、谷間の細い山道を10分ほど歩くとちょっと広い場所に古い寺があった。前もって父から住職に電話しておいたので、丁寧な挨拶で出迎えてくれ案内し簡単な説明をしてくれた。

山の中の一軒家で質素な禅寺…に先生は気に入ったようである。そこに7日程いて何とか仕事もまとまって、先生も東京に帰ることにした。大変よかったとお礼を頂いた。

転換期を支えて

病院は安定し入院患者も定数を満たし職員も元気で楽しく働いていた。

1981年（昭和56年）8月21日、金助院長が急逝した。原因は肺梗塞である。盛大な葬儀も済ませ、院長に誰をするのかが大問題となった。

翌日、奥さん、一（はじめ）さん、娘さんの婿さんである竹村さん、前田さんと四人の方が来られ、私に院長になってくれいとのことで私は即座にお断りした。婿さん二人のうちどちらかが院長になるべきで、私は今まで通り副院長としてお手伝い致しますから…お二人共夫々理由があるので出来ないのでそこを何とかとのことで、考えさせて下さいと言ってその場はお開きとなった。

翌日小木先生から（軽井沢にいて）電話があって「どうか院長になって下さい、私も成瀬先生もバックアップしますから…」「分かりました考えときます…」私は翌日秋元教授の所に行って相談して、教授はすぐに「引き受けなさい、小木、成瀬君を相談役にの条件をつけなさい…」とのことで私も腹を決め、その旨すぐ奥様に「院長、お引き受けします…よろしくお願いします…」と話が決まった。

その後のことだが病院で忘年会、納涼会などある時、先生は「僕が吉祥寺病院に功績があるとすれば、それは原藤先生を院長にしたことだ…」とニコニコ笑い乍ら皆に言っていました。（有難いことです。）

院長になった御礼に…と小木・成瀬両先生を自宅に迎え食事をしました。神戸の霜降りがあったのでシャブシャブにし、先生も好きなBordeaux（ボルドー）ワインを用意しました。お二人とも始めは静かに病院の今後のことなど話していたが酔いがまわるにつれ天下・国家を論じ、学生の質が落ちた、文化庁は何をしているんだ、今の総理はなっちょらん…とお二人の意見が対立したり合ったり、私に、どう思いますか、ときき、“そうですね…”と、私も輪に入ったが、お互いに悪口を言ったりほめ合ったりと話を楽しん

でいる仲の良い友達…兄弟…の様に思え、こんなすばらしい友達を初めてみて、うらやましく感じた…。

二時間すぎた頃「さあもう帰らないと」と成瀬先生が小木先生にすすめ、料理もワインもおいしく頂きました、と…。

帰りがけに小木先生が家内に「トイレの額がすばらしいですね」と言われたとかその言葉は今でも忘れないと言っている。

『湿原』の完結

1983年（昭和58年）5月より朝日新聞で連載の『湿原』が1985年5月に完結された。その新聞を切り抜いて集め、或る日先生にお見せした。先生が驚いて、「どうも有難う、こんなこと初めてです」と喜んでおられた。

新しい体制になって何とか運営されているが何かと問題が絶えない。その都度先生に相談、先生からの忠告…特に平成になって組合が出来てからは、次から次へと問題が起き、途中何度か投げ出そうかと思ったが、その都度先生方に支えられて来た。

1999年（平成11年）、一（はじめ）先生も一人前となって院長交替し、一方私は東精協主催の看護学校の校長を仰せ付かり忙しいのは同じだが気持の上ではずっと楽になった。先生も喜んで下さり、今までと違って教育だの人生だのの話になりいろいろ教わった。

入信

1987年（昭和62年）、先生は何を思ったか遠藤周作さんにすすめられて某牧師と4日にわたって「質疑応答」をなし、納得してキリスト教に入信、遠藤周作夫妻を代父として、妻ともどもカソリックの洗礼を受けている。キリスト教のことはフランス生活のみならず世界各国を渡り歩いて宗教のことは充分承知のことと思はれるが…、この件について何も話し合うことはなかった。残念でした。

三度の生還

先生は今まで3回命の危険を脱している。フランス留学中車で隣村へ出かけた時、慣れぬ道で交通事故を起こし九死に一生を得た（『フランドルの冬全集』の奥付より）。美しい景色にみとれハンドルを切り損なって崖から落ち池に入った。幸い深い池ではなかったようで脱出して助かった由、先生はニコニコ話されていた。

二度目は、1981年（昭和56年）2月19日友人とスケートをしていて他とぶつかって足を骨折したが頭を打ったら大変なことになったろうにと話しておられた。（日記より）

3回目は7〜8年前、同僚と宴会をしていて急に意識がなくなって救急車で近くの東京医科歯科大学に受診、救急処置を受けて助かった。若し、誰もいない所で倒れたら命とりになりかねないと先生はニコニコし乍ら話された。その後ペースメーカーをつけるようになった。この3回の危機を乗り越えて90を超える長生きが出来た。

謁見の誉

一昨年の1月、TVで皇室の歌会が放映されていた。何となく見ていると、小木貞孝の名前が出ていて、ずっと後の方で歌が讀まれた。むずかしい内容の歌で書き留めようとしたがすぐ消えてしまった。今度お会いした時、その歌について聞こうと思っていたが。場面が変わって先生が召人として天皇陛下に一番近い席についておられた…今まで数多くの賞をもらっているが今回の賞が先生にとっては一番うれしい賞ではなかろうかと思われた。先生が俳句をやることは知っていたが和歌をなさることは全く知らず又先生もその気は口にしなかった…今度来られた時いろいろお聴きしようと思っていたが、2月からのコロナ禍で病院に来られず、家庭静養していました。この1月4度目の転倒をし頭部外傷にて天国に召され帰らぬ人になりました。コロナ禍も下火になって春になったら先生をおまねきして病院でお花見をしようと思っていましたが、参加できぬ春となりました。先生は年齢的には私より3つ下の後輩にあたりますが、私にとっては人生の大先輩であり、五十余年の長いお付き合いで、幅広い知識と深い思考は私達医師に対し唯体を診るだけでなく、人間とは何かそしてその生命と死とは何かを問い考えることを教えて頂きました。有難うございました。先生ごゆっくりお休み下さい。合掌

2014年の忘年会にて。
塚本百合子元理事長、原藤名誉院長、小木先生

小木先生とのランチタイム

医局　山室 京子

私が入職したのは2003年4月、以来隔週木曜の小木先生出勤日、お昼を御一緒させていただくようになりました。先生は父、夫に次いで私が最も食事を共にした男性で、この記録は今後も破られることはないでしょう。作家、医師、研究者として高名でおられながら気さくで話し好きで色んなことに関心をお持ちで、40歳を過ぎてフィギュアスケートを始められたり韓国語を習って旅行に行かれたりと、話題も豊富でした。瀬戸内寂聴はこんなひとでね、とか文壇の裏話のようなこともうかがいました。入院受け等でバタバタし「先に一人で食べちゃったほうが楽かな…」と思った時もありましたが、やっぱり御一緒させてもらってよかった、今日もためになった、と毎回実感しました。天皇、皇后(今の上皇、上皇后)との交流もおありで、友人と共にプライベートな夕食に誘われて皇居にお邪魔した際は、天皇陛下はお話し好きで趣味のお魚の話を楽しそうにされていた、日本酒が出て美味しくてつい酔ってしまった、トイレをお借りして出てきたら皇后陛下が待っておられて席まで案内してくださり、其れに恐縮してその後のお誘いの時はお酒は飲みすぎないよう自重した、皇后陛下はとってもチャーミングな方でね…等々…。

外来の患者さんたちも長い付き合いの方が多く、ある時、外来で二人とも寝ちゃったよとおっしゃっていました。で、どうされたんですか？？とお尋ねしたら、僕のほうがかろうじて先に目が覚めたので、後から目覚めた患者さんに、すまして「だいぶお疲れのようだね」と言ったんだよ、と笑っておられました。

コロナ禍となり出勤を見合わせられるようになってランチは終了となりました。今思うとマスクもなく、楽しく談笑できた昼休みは貴重でした。世の中のことに常に関心を持たれていた小木先生が、今の日本は戦前の日本に雰囲気が似てきてるんだよ、それが心配だ、とおっしゃっていたことが少し重く心に残っています。

2011年、余震を押して小木先生の誕生会を開催
右は市川医師

小木先生を想う

外来師長　河岸 光子

私の書棚に加賀乙彦のサイン入りの本が2冊収められています。以前夫に当院の先生で有名な作家がいることを話したことがあり、作家の名前を伝えるとすぐに「読んだことはないが、結構難しい文体なんだ」と言って後日購入してきてくれました。小木先生にその本を見せると「よく探したね〜」とサインをしてくださいました。私がB2病棟に配属された頃、先生が夕方病棟へ来て、「僕が書いた本（題名は不明）にB2病棟の隔離室前の廊下で夕焼けを見た情景を本に描いたんだよ」と話してくださったことが印象的でした。診療中にも小説の構想を練って描こうとしている情景を思い浮かべていたのでしょう。

小木先生とはよく昼食時に食堂で昔の吉祥寺病院の思い出を聞いたものです。昭和56年塚本金助初代院長が突然お亡くなり、その時の話をしてくださったことがあります。院長の後継者をどうするかでかなりもめていた様子で、後継者として金助先生の娘婿殿をと考えられたが、様々なご事情でかなわず、小木先生はその時のことを「突然病院から呼び出されてね、次の院長を『原藤先生（当時副院長）にお願いしたいので一役かってほしい』と言われてね、もう一人の先生と二人で夜、原藤先生のご自宅へ向かい、事情を話し説得を繰り返し、何とか院長になって欲しいとお願いしたんだ」と懐かしそうに話されておりました。

その後A3病棟に配属され、地域移行カンファレンスを開くことになりました。先生はご高齢になり体調不良でお休みされることが増え、病棟の受け持ち患者さんはA3病棟にいたSさん（R4年9月合併症転院先で死亡）のみでした。Sさんは当院で数十年経過する長期入院患者で、先生はSさんを下の名前でTちゃん、Tちゃんと親しんでいました。地域移行カンファレンスを毎年実施していましたが、その時のやり取りしていた場面を紹介します。

先生：Tちゃんは僕がいる限りこの病院で診る。
河岸：先生、ご家族に「一生面倒を診る」と言ったんでしょう。
先生：（ニヤニヤと笑ってうなづく）
河岸：今時一生入院するという事はあってはならない、地域へ戻すべきです。
先生：Tちゃんは此処にいることのほうが幸せなんだ、慣れ親しんだ此処からどうして知らないところへ出そうとするんだ、本人がかわいそうだ。
河岸：先生もお年なので若い先生へつないでほしい、先生が体調を崩されたら本人がかわいそう。

そんなやりとりを不躾ながら良く交わしていたものです。

先生がお亡くなりになったのが、なんとSさんが亡くなった4ヶ月後でした。まさに先生の最後の患者となったのです。入院治療の目的や考えは違いましたが、こよなく患者さんを愛していた先生でした。ご冥福をお祈り申し上げます。

小木先生から教えて頂いた家族支援

医療相談室　花立 幸代

小木先生との思い出を振り返ると、それは、A氏の退院支援です。

その頃は行政が退院支援の体制を構築し始め、地域支援者が病院に足を運び始めた頃でした。

A氏は、昭和58年に当院に入院し、私が担当PSWとなったのは平成18年で、その方の主治医が小木先生だったのです。著名な作家の先生であることは存じ上げていましたが、共にお仕事ができることに、うきうきしたことを覚えています。

先生と退院支援をする中で、とても勉強になり、今でも私の退院支援の核となる部分の一つとしてあるのは、ご家族へのアプローチです。

A氏のお話に戻りますが、ご家族に退院支援の提案を申し入れた時、とても反対されました。

先生からは、退院を目指して挑戦していきたいので協力してほしいという旨をご家族に提案して頂い

たのですが、その後、すぐに何かあったら病院が責任をとってくれるのか、退院は受け入れられないという連絡がきました。当時のご家族の見解としては、当然の意見だったと思います。その後のご家族への先生からのアプローチは、面談できる日程ばかりではなかったので、見解を伝言したり、手紙をしたためたりされていました。

我々職員へはご家族の気持ちが納得することが退院において重要だと繰り返し話されていました。そして、それは、退院後の家族関係に如実に表れることとなります。

小木先生の語録としては、退院を挑戦させたい(決して退院させるとはおっしゃらなかったです)、アパートが見つかったので、今がチャンス…このワードを織り交ぜながら、病状説明と共に繰り返し、伝えていました。

ご家族は小木先生のことは、当然ですが信頼されており、最終的に「先生に言われたんじゃ仕方ない」と退院を了解して頂きました。

挑戦させたいと先生が申し入れてから1年半が経過していました。もちろん、本人の課題もあり、ご家族の反対だけに費やされた期間ではありません。

退院後は、ご家族と本人をつなぐアプローチも加わり、本人へは2つの約束を提示されました。一つは、部屋をきれいにすること、二つめは家族に会ったら感謝を述べるということでした。

退院後、A氏は、実家に泊まりに行ったり、ご家族と職員の噂話をしたんだよと、他愛のないことですが、嬉しそうに話してくれました。

「家族と本人をつなぐこと」は、その後の在宅生活の継続にも関わってくるのだと改めて思いしらされました。

その後もA氏は入退院をしながらも、地域で暮らしています。

最後に…

先生からご家族へのお手紙の内容を抜粋して記させていただきます。

拝啓

先日は御葉書を贈っていただき有難うございました。私は芸術のことはわかりませんが立派な作品をお書きになっているのに感服しました。

さて、退院のことですが、作業所での成績もよく、他患者の指導にも熱心で病状も安定しています。

最近、作業所の近くにアパートの空きがあり、私主治医としてはぜひこの機会にアパート住まいをさせたいと思っております。もちろん病気の治療については私が責任をもって外来治療をつづけますし、アパートには定期的に当院及び作業所の人間が訪問していきます。

この点をぜひお考えくださり、当人の病気の治療のため、またご家族の安心のために、アパート住まいで独立させてみたいと存じます。

どうか当人と家族の方々の安心のため私の微意をお汲み下されば幸甚と存じます。

草々

吉祥寺病院　医師　小木貞孝

(加賀乙彦)

本人の自己決定が重要視されていますが、そのことと共に「家族と本人をつなぐ」ことも、治療や支援のひとつとして、組み入れながら考えられる支援者であり続けたいと思います。

先生のご冥福をお祈り申し上げます。

ベレー帽のおじさん

医療相談室　野口 明子

小木先生、空から、あの優しい笑顔で微笑んで下さっていますか。

私が小木先生を吉祥寺病院で初めてお見かけしたのは外来で診察されているお姿だったでしょうか。穏やかで優しい笑顔がとても印象的でした。と、同時に初めてお会いしたとは思えない感覚を覚えましたが大変高名な先生でいらしたので、メディアを通じて拝見したことがあるのかなと自分を納得させました。

月日は流れ、ひょんなことから、山室先生に、小木先生が長らくフィギュアスケートをご趣味にされ

ていたことを教えていただきました。

ビビビビビ、、、、一度ストップしていた記憶の溯りが再びスタートしたのです。

幼い頃、私はテレビで見たフィギュアスケート選手のヒラヒラ、キラキラする衣装に憧れ、両親にせがみフィギュアスケートを習いはじめました。程なく、その魔力にも似た魅力に取りつかれ寝る時間と学校に行く以外のほとんどの時間を練習にあてるようになりました。小学校の授業が終わり、スケートリンクに着くのが15時ごろだったように記憶しています。

平日15時ごろのスケートリンクは多くのマダムがワルツを優雅に滑走する時間でもありました。マダム達の中に子供の私ですら分かる上質な紺のフェルトでできたベレー帽と紫がかったレンズのメガネをお召しになり、目の大きい、優しいおじさんが優雅に滑走する姿が目を引いたことは言うまでもありません。仲間たちと『ベレー帽のおじさん』とあだ名をつけました。

ビビビビビ、、、、あの、お顔、お姿、、、、、ベレー帽のおじさんは小木先生だったのではないか、私の心が躍動しました。確かめたい！先生の出勤される曜日が待ち遠しくなりました。畏れ多く、モジモジしてしまい何度もお声をかけるチャンスを逃しました。しかし確かめなかったら後悔すると、勇気を振り絞り、記憶の情景を小木先生にお伝えしました。小木先生は驚いて目が落っこちてしまいそうなお顔をされた後に、「あなたとはずいぶん前に出会っていましたか。そうでしたか。」と幼い私の記憶にいるベレー帽のおじさんの優しい笑顔で答えて下さいました。

小木先生、月日を経て二度の素敵な出会いをありがとうございました。ご冥福をお祈り申し上げます。

“命”と向き合って

看護部　PN：猫ちゃんのママ

小木先生は、週1回、吉祥寺病院に診察に来てらっしゃいました。直接お話をさせていただくことはあまり多くはありませんでしたが、先生の担当の患者さんを診察室までご案内し、最近の様子をご報告させていただくことがありました。先生は、いつもにこにこされていていました。担当の患者さんとの診察でもあたたかい笑顔でお話されていて、時には、爪を切って下さっていることもありました。

小木先生のことを思い出すといろいろなことを思い出します。40年程前のことでしょうか。浦澤婦長さんと小木先生がよくお話してされていました。丁度、先生が宣告を書き上げられた頃かもしれません。浦澤婦長さんにすすめられて、私も「宣告」を読みました。精神科医として犯罪者の心理を細かく描写にされていて、その当時、まだ精神科に勤め始めたばかりの私は、人の心理の深さを教えていただきました。吉祥寺病院が舞台の「湿原」も読ませていただいたことも大切な思い出です。吉祥寺病院に看護助手として勤めていたことがある友人と連絡を取り合うことがあるのですが、小木先生のご逝去を受けて、彼女も改めて小木先生の著書を読み返しているそうです。

こちらも浦澤婦長さん教えていただいたのですが、小木先生が能の脚本を執筆されたことがありました。高山右近の生涯を描いたもので上野へ観劇に行ったこともとても印象に残っています。和楽器と西洋の楽器を用いた前衛的な能の舞台でした。衣装は森英恵さんが手がけていたそうです。本当に素晴らしく感動しました。

晩年の小木先生は、奥様をなくされてから落ち込んでおられるようにお見受けしました。その頃に、命についての小木先生の講演会が調布で行われたので参加させていただきました。「延命」ということをテーマに自分の生き方や命は自分で決められるというお話に深く考えさせられました。

小木先生が逝去され、とても淋しいです。そして、たくさんのことを思い出します。そして、感謝の気持ちでいっぱいです。

小木先生のご冥福をお祈り申し上げます。

人に寄り添い続けた小木先生

看護部　吉岡 恵美子

小木先生が逝去され、本当に淋しく思っております。先生との思い出をお話させていただく機会をいただき大変光栄に存じます。

小木先生といえば、担当の患者さんとのやりとりと思い出します。僭越ながら、こちらでご紹介させていただいます。

ある日のことです。小木先生が病棟にいらっしゃいましたので、患者さん（仮名：のりさん）を呼びにいきますと、あまりに不機嫌で頭から布団を被ってしまい、診察室には到底行ってくれそうにありませんでした。すると、小木先生は、病室にいらっしゃいました。「先生がいらっしゃいましたよ」と私がのりさんにお声かけしましたが、「知らないよ！！」とますます怒るばかりでした。私は、先日、のりさんと看護師で外出し、おいしいお肉を食べてきたことを先生にお話しました。先生が「のりちゃん、お肉食べに行ったんだって？」と声をかけられると、のりさんはやっとお布団から顔をだして先生と笑い合っていました。先生とのりさんの厚い信頼関係に驚かされるばかりでした。

先生が面接中に爪切りを探しておられたことがあります。爪切りをお渡しすると、「のりちゃんの爪が伸びているんだよ」と先生がおっしゃいました。私はとても恥ずかしく思い、看護が行き届いていなかったことをお詫びしました。すると、先生は、

「いやいやいいんだよ。のりちゃんはさ、爪なんて切らせてくれないだろう？　僕が話しながら切るからいいんだよ。ね、のりちゃん」

と、のりさんの爪を切ってくださいました。いつもなら、爪切りを怖がり、強く拒否をするのりさんがにこにこしながら先生に爪を切ってもらっていました。

小木先生の本では「宣告」を読ませていただきました。何百ページに及ぶ大作で、一所懸命読んだことも思い出に残っています。人間の心理を描き、死刑囚一人ひとりに寄り添った本でとても印象に残っています。

小木先生からは、人としてどのように相手と向き合うのかということを教えていただきました。先生のご冥福をお祈りいたします。

小木先生の思い出

臨床心理士　江原 由美子

「ちょっとフランスに行っていたら随分と長くお休みしてしまってね」とひょっこりと医局にいらしてご挨拶されるような気がしてしまうのは私だけでしょうか？

実は小木先生とは勤務日が異なっていたために院内でお会いすることはほとんどなく、その後のコロナ禍で忘年会もなくなったため、リアルな小木先生にお会いしたのはほんの数回しかありません。それでも、小木先生のキラキラとした好奇心旺盛な少年のような瞳と、誰に対してもゆっくりと語りかけるような声が、不思議なことに今でも頭の中では再生されてくるのです。

加賀乙彦という小説家が精神科医ということを私が知ったのは今から40年ほど前に遡ります。『フランドルの冬』の書名は知っていても硬い純文学かつ長編となるとなかなか気軽には読めず、60年ほど前に書かれていた小木先生の精神医学の論文（フランスの妄想研究1960、拘禁状況の精神病理1965）についても心理学を学び始めて数年のヒヨコには全く訳がわからないだろうとして、読む機会がないまま月日が流れてしまいました。

40年ほど前、実は幸運にも笠原嘉＋加賀乙彦の「精神医学講義」にふれる機会がありました。と言ってもこれはリアルな対面講義ではありません。もちろん今のようなオンライン講義もありませんでしたので、当時流行りのレクチャーブックシリーズ（全３０巻）の中の一つであった「精神医学講義」です。対談形式ゆえ読みやすかった記憶があるのですが、内容はすっかり忘れていました。

小木先生が天に召されてから、久しぶりに本棚からセピア色になった本を取り出してみると、当時は今のような付箋がなかったためか、気になるページに折り目がついていました。そのページを開くとドストエフスキーの病気（てんかん）と作品について、ドストエフスキーの人柄と登場人物の人柄との関係などが随分と詳細に語られているのを見てびっくりしました。私が「病跡学」というちょっとマイナーな研究を知ったのは大学病院に勤務してからだとずっと思い込んでいましたが、もしかすると小木先生の「精神医学講義」の方が先であったのかもしれません。病跡学とは古くは狂気と創造の研究に始まり、歴史的に傑出した芸術家、科学者、などの生涯と作品について精神医学や心理学の観点から研究するものです。もうすっかり内容を忘れていましたが、40年ほど前にこのレクチャーブックから精神の病と創造性の関係について興味を持つきっかけを与えてもらえていたのでした。病跡学について直にお話を伺う機会を逸してしまいましたが、これから『小説家が読むドストエフスキー』（集英社新書）を読みながら、脳内で先生と会話をしたいと思っています。

もしかすると、犯罪心理学者、精神科医、小説家といずれも傑出した才能を発揮され多彩な顔をもつ「加賀乙彦」の病跡学的研究がこれから出てくるかもしれません。それはさておき、「作中人物を造型するときに核となるのは一つは自分、もう一つは自分の知っている他者」とおっしゃっているので、作品の中にも小木先生を核にした人物や、小木先生の周りの人たち（患者さんだけでなく、吉祥寺病院の先生方も？）を核にして造型された人物がたくさん登場しているのかもしれません。人物描写の中には精神科医としての共感的かつ客観的な眼差し、対人状況全体を観察する眼差しがあります。小木先生の診察には陪席することはありませんでしたし、もうリアルな先生にお会いしてお声を聞くこともできませんが、先生がこの世に送り出されてきた多くの作品の中から私でも読みやすそうな小説を手に取り、その作品の中で再会できることを楽しみにして、、、。

小木先生、貴重な出会いをありがとうございました。

湿原のころ

看護部 山本 昌彦

小木先生に初めてお会いしたのは私がまだ北海道に居た頃で当時の私は中学生であり、40年以上も前になる。先生が実家にいらした時、小木先生は医者であり、朝日新聞に「湿原」という小説を連載するにあたり、ここ北海道の辺鄙な土地に取材に来たのだと聞いた。(小木先生の「湿原」は朝日新聞朝刊に1983年5月～1985年2月までの約2年間、628回に渡って連載された)

父は狩猟や撮影などで訪れる人たちを船と車で案内していたが、小木先生にも同様にあちこちリクエストに応じて案内していたようだった。小木先生が東京から来られるとき、必ずもうおひと方いらしていて、朝日新聞の連載の挿絵を描かれる画家の先生であるとのことだった。3人集まると鹿肉、鮭のルイベなど、北海道ならではの料理を食べながらワインを酌み交わしていらした。画家の先生は酔うと小木先生の前額部あたりをペシペシと叩き、普段の佇まいからはとても想像できない砕けようだった。小木先生も怒るでもなくむしろ愉快そうにされていて、そんな光景を見て私は先生方の素面の感じとは違う雰囲気を不思議に思い、同時に大の大人3人の戯れる感じがとても楽しそうでうらやましいとも思っていた。

湿原の連載当時、その小説を私は読んでいなかった。ただ、ある挿絵が掲載されたときにずいぶんと驚いた。それは見慣れた帽子をかぶり、ライフル銃を構えている私の父だった。鉛筆のみで描かれたその画はとても緻密で写真のようにも見えた。さらに数年後、その原画が実家の壁に飾られているのを見て再び驚いた。実はその後、この先生が描かれた鳥の巣の画をとある機関誌に使わせていただいたこともあった。

私は小木先生の執筆された「頭医者」という3部作からなる小説を読んで精神の病気のことをなんとなく知り、ゆくゆく吉祥寺病院へ就職するきっかけとなったが、「頭医者事始」(ことはじめ)、「頭医者青春期」、「頭医者留学記」この3冊を一気に読み終えてしまったことを憶えている。文体が先生のほかの作品ではあまり見られない軽妙さで綴られており、先生方のインターン時代の苦労や普段聞くことのない内側のお話も含めてとてもコミカルに描かれていて楽しく読ませていただいた。ただ、面白いだけではない部分、病院火災の顛末も記述されたりしている。そんな中で一番驚き、衝撃を受けたのが頭医者事始13章の部分でそこには同期の先生が統合失調症を発症する顛末が記述されていて、小木先生はその同期の先生をなんとか説得して入院の世話をされている。そして「優秀な頭脳の持ち主で(中略)精神医学に深い学識をそなえている人でも精神病の力には勝てなかったということだ。」と書かれていて、さらに“人は大抵、人の精神を支えている奥底の力には無関心で自分の精神は自分の自由になるものと信じて安心しているが、ほとんど肉体と区別のつかない精神の領域が確かにある(その部分はコントロールすることはできない)”ということも記述されている。それまで精神の病気について私は何も知らず、しっかりしてれば大丈夫だろう的な、何ら根拠もないどころか、うがい手洗いしてれば病気は防げるはず程度の感覚でいたため、その道のエキスパートであっても逃れることのできない病であると

「レミントン M700、7ミリマグナム」

「鳥の巣」
※機関誌で使わせていただいたもの

認識して震え上がるほどの恐ろしさを感じた。

小木先生からは吉祥寺病院とそこで仕事をする職員の方々の様子なども直接聞いていた。高校卒業時に進みたかった道が閉ざされて2か月ほど糸の切れた凧状態だった頃に頭医者で興味を惹かれ、「働きながら看護学校に通う人や、大学生のアルバイト、いろんな人がいてね...」といった小木先生のお話を聞いてどんどん気持ちが傾き、就職を決めてしまった。

やがて吉祥寺病院に勤め始め、小木先生とお会いするようになり、その威厳ある白衣姿、執筆された書籍が多数におよび幾多の賞も受けられ、日本文芸協会理事も務められている人物と認識したけれど、昔、北海道の片田舎で頭をいじられても微笑みながら穏やかに応じていたあの方と本当に同一人物なのかとにわかに信じられなかった。

今年の5月、千葉県にある美術館に出掛けた。湿原の挿絵を描いていた画家の先生の画が展示されていて、昨年からみんなで行きたいと思っていた。展示会のことはニュースで知って北海道に住む母と弟にもみんなで見に行こうと相談していて、それが昨年5月のことだった。集まって当時を偲べるかと思っていたが、それはとうとう叶わなかった。

「神仙沼―保木将夫氏に捧ぐ―」と題されたその巨大な絵画は3×7mもあり、言い表せない迫力で見る人を圧倒しつつ、強く惹きつける力を持っているように感じた。一緒に見たかった人たち、父も母も今はもう世を去ってしまったが、この先生の画を見るたび小木先生や父母のことを想い出すことができるだろうと思う。この画はさらに手を加えていくのだという。またいつか展示会を訪ねて小木先生、父母の在りし日を想いたい。仕事の事だけでなく、いろいろな面でお世話になった小木先生には何一つお礼もできぬままお別れすることになってしまった。今更ながら深く感謝するとともに先生のご冥福を祈りたい。

出典
湿原の挿絵1および2
野田弘志画集「湿原」
著者　野田弘志
発行所　朝日新聞社
発行日　昭和59年6月15日　第1刷

ホキ美術館　千葉県千葉市緑区
野田弘志氏の「神仙沼―保木将夫氏に捧ぐ―」が
展示されている
（撮影／2023年5月21日　山本昌彦）

本能寺からお玉ヶ池へ ～その⑯～

医局　西岡　暁

医局　西岡　暁

何処(いずこ)の野山も浦も里も、万緑に輝く夏になりました。夏はまた、日が長いので夕焼けの季節でもあります。ですが、正岡子規や高浜虚子の時代はまだ(?)夕焼けは季語ではありませんでした。それが今では俳句雑誌「ホトトギス」同人が夕焼けを季語に詠む時代です。

素晴らしき夕焼よ　飛んでゆく時間　(嶋田摩耶子)

どれ程「素晴らしき」「時間」を刻んだとしても、佳き日々はあっという間に「飛んでゆ」き、どんな花も人も必ず「散りぬべき時」を迎えます。

年明けに我等が(?)加賀乙彦こと小木貞孝先生が帰天されて早や半年になりましょうか？ 小木先生は、「加賀乙彦自伝」でこう語られています。

「私の洗礼名はルカで、…私がルカを選んだのは、福音書を書いたルカは医者で、私は作家専業となってからも、ずっと医者を続ける気持ちがあったからです。　…当時もいまも、ある私立精神科病院で定期的に患者を診ています。」

そう、小木先生が「ずっと医者を続け」られた「私立精神科病院」こそ、ここ吉祥寺病院なのでした。

そこで、この夏「じんだい」は、小木先生を偲ぶ特集を組んでいます。ですから、こちらでも小木先生に関わるお話を致しましょう。

小木先生が1929年(昭和4年)に誕生した処は、お母様の実家の野上病院(現存しません。@港区三田2丁目)ですが、小木家の住まいは旧加賀藩主・前田家の屋敷内(こちらは別邸@新宿区歌舞伎町2丁目で、お父様の生家は本邸《ご存知かも知れませんが、その時代前田家本邸は東大本郷キャンパス内。1930年に現在の都立駒場公園に移転。》)でした。お祖父様の代まで小木家は代々加賀藩士だったからです。ですから小木先生は、学生時代から東大病院時代の15年の間毎日のように(西大久保から本郷へと)二つの前田屋敷(跡地ではありますが、)を行き来されていたことになります。その15年の間先生は、何時も赤門から東大構内に入られました。その頃鉄門はまだ(?)再建されていませんから(2006年再建)、通りたくても通れません。尤も鉄門は、先生が通学通勤に利用された都電の通りからは大分離れていますから、再建されていたとしてもやはり通ることはなかったでしょう。

ご存知ないかも知れませんが、「都電(＝東京都電車の略称)」は、1903年(明治36年)開業の私鉄「東京電車鉄道」を前身とする都営の路面電車で、今は荒川線一か所しかありませんが、1960年代までは都民の足として都区内中(約80路線)を走り回っていました。「加賀乙彦自伝」によれば、「新宿の自宅から本郷の東大まで都電で通っていました。いまの歌舞伎町2丁目―昔の西大久保―から13番線の万世橋行きで松住町まで行き、そこで19番線の駒込行きの電車に乗り換え、赤門前で降りる。」のだそうです。「松住町(まつずみちょう)」(現・千代田区外神田2丁目)は、神田川北岸の町で、そこから1kmほど下流には「和泉橋」があります。和泉橋の北側は「お玉ヶ池種痘所」が再建された処であり、幕府の直轄になって種痘所が移転した藤堂藩上屋敷があった場所です。その対岸(南岸)には、大昔「お玉ヶ池」が水を湛えていました。

小木先生が卒業された東京大学医学部は、「お玉ヶ池種痘所」として「創立」された医学校です。(ここ迄何度も述べたように)「…種痘所は東京大学医学部のはじめにあたる」(「お玉ヶ池種痘所記念碑」)のです。東大になってからも医学部は、お玉ヶ池種痘所の正門に因(ちな)んで「鉄門」と呼ばれました。

大学を卒業した先生が入局(当時「臨床研修制度」はなかったので、卒後すぐ各科医局に入局しました。)した東大精神科の教授は内村祐之(1897～1980)でしたが、先代教授は三宅鑛一(＝お玉ヶ池種痘所発起人・三宅艮斎の孫)です。また、先生の祖父の先妻(なので、血縁ではありません。)の妹は、[10]に登場した(「味の素」の素？)池田菊苗の妻で、その父(なので、系図上の曽祖父)・岡田棣(なろう)(1836～1897)は、加賀藩士(高岡町奉行、軍艦奉行、大参事)で1863年(文久3年)に藩校・壮猶館(そうゆうかん)に入学した人です。[10]で述べたように、三宅秀は1867年

壮猶館
出典 いしかわの文化

(慶応3年)にその壮猶館の翻訳係に就きました。(岡田棣はその頃軍艦奉行でしたので、三宅秀との出会いはなさそうです。)小説「帰らざる夏」は、「三島批判」であると「同時に追悼」でもあるそうですが、三島由紀夫の曽祖父は、壮猶館の漢学教授・橋健堂です。

小木先生は、芭蕉さんの愛読者でもあります。「わたしの芭蕉」という著書で、「芭蕉は、美しい日本語の世界に遊ぶ楽しみを私に教えてくれた。」と書かれています。先生自身の最期の言葉は分かりませんが、この本の中で芭蕉さんの最期の句

旅に病んで　夢は枯野を　かけ廻る　(芭蕉)

について、こう書かれています。

「一度読んだら忘れられぬ温と寒とが、この句に充満し、不思議な力を発散している作品である。芭蕉の死後も、いつまでも忘れられぬ、永遠に生きる句である。」

小木先生はまた、ご自身がクリスチャンであるためか「宣告」、「高山右近」、「殉教者」等クリスチャンが主人公の小説を幾つも書かれています。そんな先生は、最後に(?)ガラシャの小説を書く意欲を示しておられました。加賀乙彦の「ガラシャ」が書かれていれば、きっと「永遠に生きる」作品になったことでしょう。

[19]　一橋、本郷

さてここからは、前回の続きです。

徳川幕府の洋学所「蕃書調所(ばんしょしらべしょ)」は、1862年(文久2年)に「洋書調所」となって護持院ヶ原に移転しました。その頃の護持院ヶ原は、福沢諭吉によれば「大きな松の樹などが生繁(おいしげ)って居る恐ろしい淋しい処で、追剥(おいはぎ)でも出そうな処だ」(「福翁自伝」)ったようです。

「洋書調所」はその後「開成所」、明治維新後は「開成学校」、「東京開成学校」と名を変え、1877年に「東京大学」が開学すると、その法・理・文三学部に発展しました。洋書調所がイギリスに発注した洋書の納入時に幕府(は既に崩壊していたので)には資金がなく、外国方・田辺太一に相談された三宅艮斎の計らいで(三宅秀を介して、非常に欲しがった福澤諭吉の先を越す形で)加賀藩が購入することになりました。

元「護持院ヶ原」の「東京開成学校」の跡地(現・学士会館@千代田区神田錦町3丁目)に「我が国の大学発祥地」碑が立っていますので、読んでみましょう。

「当学士会館の現在の所在地は我が国の大学発祥地である。…明治10年(1877)4月12日に神田錦町3丁目に在った東京開成学校と神田和泉町から本郷元富士町に移転していた東京医学校が合併し、東京大学が創立された。創立当初は法学部・理学部・文学部・医学部の4学部を以て編成され、 …法学部・理学部・文学部の校舎は神田錦町3丁目の当地に設けられていた。…この地が我が国の大学発祥地すなわち東京大学発祥の地ということになる。」

この碑文にある1877年4月に「東京大学が創立された。」と言うのは、正確には医学部以外の三学部(現在の東大は、医学部を含めると10学部あります。)についてです。東大医学部の創立は(先程も述べたように、)「お玉ヶ池種痘所」の創立

だったのですから、東京大学医学部の「創立」は、(他学部より19年早い)「1858年5月7日」と「定め」られているのです。

東大医学部は、江戸時代の創立時には「お玉ヶ池種痘所」で、通称「鉄門」と呼ばれていました。明治維新後お玉ヶ池種痘所は、医学校兼病院、大学東校、東京医学校、と何度か名を変えて「東京大学医学部」になったのですが、その20年の間も通称の「鉄門」は変わりませんでしたし、そればかりか、今日もなお「鉄門」と呼ばれています。(そのことも、昨年[9]で述べました。)

それに対して、東大開学時の(法・理・文)「三学部」は、洋書調所、(洋書調所が改称した)開成所、東京開成学校、があった一ツ橋の護持院ヶ原に開学したので「一橋」と呼ばれました。[10]で三宅秀が福澤諭吉に叱られた「一つ橋の大学」です。1885年(明治18年)に「三学部」が一橋から本郷キャンパスに移転した後は、「一橋」の名を「東京高等商業学校(現・一橋大学)」に譲ったので、医学部以外の学部の通称は無くなってしまいました。仕方がないので(?)「赤門」と呼ぶ方もいらっしゃいますが、赤門は本郷に医学部しかない頃からありますし、東大開学時には医学部(だけしかなかった)の通用門でした。赤門は医学部に行く時にも通れますので、(東大全学であればともかく)「医学部以外の学部」を指すのに相応しいとは言えません。(東大関係者でなければ、どうでも良いことかも知れませんが、)困ったものです。

東大医学部の公式サイトにも、赤門との関わりが書いてあります。

「東京大学の赤門は、明治9年(1876)当時東京医学校(現東京大学医学部)が下谷和泉橋通りから本郷の現在の場所に移り新しい大学と病院の運営が始まり、明治17年(1884)他の学部が本郷に移るまで医学部の門として使われていました。

赤門は、文政10年(1827)江戸時代の有力大名の加賀藩主前田家が、前田斉泰(なりやす)に嫁いだ11代将軍徳川家斉(いえなり)の娘溶姫(よう)のために建てられた朱塗りの御守殿門です。当時、大名の子息が将軍の姫君と結婚するとき、花嫁のために赤い漆を塗った門を建てる習わしとなっていました。

また、この門は武家屋敷の門の中でその希な様式と美しい表現が認められ、現在国の重要文化財に指定されています。」

前田斉泰(1811〜1884)は、前田利長(利家の嫡男)を初代とする加賀藩の12代藩主で、溶姫の輿入れのために江戸屋敷に赤門を建てて27年の後、地元・金沢に洋学所・壮猶館を創設し、その更に13年後、その壮猶館に三宅秀を雇い入れた人です。後年、三宅秀が赤門の(?　本当は鉄門の)東大医学部の最初の学部長になったのも不思議な御縁ですね。

話は変わって、東大工学部鉱山学(現・システム創成学)教授・山口吉郎(きちろう)(1892〜1988)は、俳号を青邨(せいそん)と称する「ホトトギス」の同人です。工学部は赤門より大分北寄りなので、普段は正門を使っていただろう青邨は、赤門の句を幾つか詠んでいます。

赤門は古し　紫陽花(あじさい)も　古き藍　(山口青邨)

東京大学発祥の地

東京大学　赤門

小木先生の思い出

PN：佐伯 彰一（元患者）

私が医者になったのは34歳のときだった。だから3年ほどひまがある。

私の父親も好みの作家でよく読んでいた。

「吉祥寺病院は私ゆかりの病院だから特別に思っている。」

8月1日退院・卒業を喜んでくれたのが小木先生だった。

加賀先生からは薬理学や生理学を教わった。

未見の彼

システム管理室　朱　暁

吉祥寺病院に医局秘書として入職して少し経った頃。副院長の土井先生が「長く休んでる先生がいるんです。電話して、ご様子を聞いてみてくれる？」と仰いました。

電話がつながると開口一番
　ぼくのことを覚えていてくれたんですか
と　あなたは大変驚かれました
　だいぶ長く寝たきりだったから
　忘れられていると思っていました
おどけたように　申し訳なさそうに
話すあなたに　私はうつむき
　みなさん　待っていますから
　ぜひ　いらしてください
と申し上げました
　でも　とあなたは声を震わせました
　僕はもう　歩けない　歩けないのです
私はうなることしかできず
短い沈黙がありました
電話の向こうで　雀がチュンと鳴きました
　みんなお花見をしている頃でしょうね　と
あなたは急に仰いました
しかし折しも時節はコロナ禍で
世界は閉じこもっておりました
そんなニュースにも触れないほど
隔絶されて　過ごされたあなたの
闘病と労苦を思いました
あなたは遠慮がちに言葉を続け
　ぼくはもう歩けないのです
　人の助けが要るのです
　そんな僕が　仕事に行ったら
　患者さんも困るでしょうから　と
残念そうにこぼされて
私は思わず
　そんなのは何もご心配いりません
と申し上げました
　車椅子が通れるように道を片付けて
　お仕事ができるようにお支えしますから
　どうかどうか　またいらしてください　と
受話器を強く耳に当て
決してこのよすがを手放すまいと
いつになく慎重に
　本当に　大丈夫ですから　と
重ねてしつこくお伝えすると
あなたは
少し　ふふ　と　笑い
　桜が散って　夏が過ぎて
　涼しい季節になりましたら
　いつか皆さんに会いに行きましょう
と　朗らかに仰ったのです
私は
　お目にかかれるのを心待ちにしております
と　窓に向かって　頭（こうべ）を垂れて
短い通話を終えたのでした
そして二年が経ちました
あなたの訃報に触れました
私は静かに　泣きじゃくり

とうとうあなたに会えなかったことを
悔い　悲しみ　悼みました
廊下に風が吹き渡り
土と落ち葉が舞い込みました
あなたの歩いた思惟の道を
だいぶ後から　私も征きます

未来を眼差す

新聞記事のご紹介

2005年(平成17年)2月18日(金曜日)

東京新聞　(夕刊)

放射線

一九六〇年四月に東京都調布市のある私立精神病院に医師として勤めてから、これで四十六年目となった。もっとも常勤医ではなく、週一日のパート医者で、このごろは二週間に一日の非常勤であるが、ともかく切れ目なしに精勤してきた。

当初病院は創設されて五年目で、まだ木の香もかぐわしい建物だった。が、周囲は畑で道は未舗装で街灯もなく、通勤には長靴と懐中電灯が必須の品であった。付近には雑木林、竹林、農家があり、数多くの植木屋が各種の樹木を植えていた。

隣に家が建ち、三十年ほど経つと、それが小さく分割されて建売住宅となった。林も農家も畑も植木屋も消えて、住宅やアパートがひしめき、今ではすっかり街中の病院となった。

院長、事務長、婦長がつぎつぎにとくなった。医師や看護婦や看護士も顔ぶれが絶え間なく代わった。私は先輩医師として若い医師たちの臨床指導をし、ともに研究したり学会発表をしたりした。大学で精神医学を講じていたときには、この病院が教え子たちの研修のフィールドとして役立った。

45年間の病院

木造の病棟が古びて鉄筋コンクリートに建て替えられた。そのコンクリートも劣化してこわされ、最新式の新病棟と設備を持つ大病院となった。

私が勤め始めたとき赤ちゃんだった人が今の院長だ。現院長の母上は前院長夫人で、息子を抱いて院歴を歩いていた姿が思い出される。長期入院の患者さんの老齢化が目立って見えるが、むこうだって私のことをそう思っているにちがいない。人生は短く、病院は永遠です。

(加賀　乙彦＝作家)

日本経済新聞（夕刊）

（9）　1994年（平成6年）3月8日（火曜日）

プロムナード

34年間

加賀　乙彦

三十四年間、私は医師として東京近郊のK病院に勤めている。こう言っても、すこし補足が必要である。

三十四年間勤めているのは確かだが、それはパート医者としてであって常勤医としてではない。最初のうちは週一日の勤務であったのが、最近は二週間に一日で、新しい患者は診ていない。

それでも長年、同じ病院にいると、年月の厚みをしみじみと感得しうる。

一九六〇年の春、フランスから帰国したばかりの私は大学精神科の助手をしながら、この病院のパート医者となった。中央線のK駅からバスで三十分、それから畠のなかを突っ切って十分ほど歩くと木造平屋建ての精神病院についた。未舗装の道は雨が降れば泥のなかで、街灯はなく、雨靴と懐中電灯が必需品であった。慢性の入院者が多く、外来者はほとんどなく、病棟での仕事が主で、すこぶるのんびりとした勤めぶりであった。

おいおいに周囲に家が建ちはじめた。林が切られて市立高等学校となり、あちこちの畠が建売住宅でうずめられて、住宅地帯の様相を呈してきた。

あるとき、病院は畠の畠を買収して敷地をひろげた。まだ新病棟建設の構想もないのに、周辺の住民から精神病院拡張反対運動がおきた。これは院長のねばり強い説明で住民側が納得して終わった。

しばらくして、鉄筋コンクリート二階三階建ての新病棟が完成した。このころから、外来者が増えてきた。医師、看護婦の数も増えて、仕事も忙しくなった。

私が来たころ、苗木だった桜が大木に育って、春には満開の花の下での宴が行われるようになった。

院長をはじめ、事務長、婦長、何人もの入院者や職員が死んだ。医師、婦長、看護婦、看護士、事務員の顔ぶれも変わった。私が来たときにいた人は、今理事長をしている前院長夫人以外は、今は誰もいない。私は最古参の職員になった。

歳月の厚みを実感させるのは、入院者たちが年老いたことである。若かった人が白髪の爺さん婆さんになっている。まあ、これはおたがいさまで、向うも、あの医者は何と老いぼれたことかと思っていることだろう。

病院に行くたびに感じるのは、年月の移ろいとともに、変わらぬことである。それは精神医療が、この年月ほとんど改善されないということだ。診断治療の技術の面でもあまり大した進歩はないが、それにも増して行政の取組が変わりばえしない。退院した精神障害者の社会復帰のための中間施設（職業訓練所や宿泊施設）は足りないし、専門の訓練を受け、意欲に満ちた看護婦も不足している。治癒した患者さんを就職させようにも世間の偏見はいぜんとして強い。

三十四年、一つ病院になぜ勤めたか。患者さんと職員に親しみを覚えたからだという理由のほかは、思いつかない。

（作家）

外来担当表

初診

	月	火	水	木	金	土
第1週	畑	岡田	森	田澤	種田	稲川
第2週	狩野	西岡	森（栄）	山室	宮崎	市川
第3週	畑	岡田	森	田澤	種田	稲川
第4週	狩野	西岡	澤井	山室	宮崎	市川
第5週	畑	岡田	森	田澤	種田	市川

再診

月	火	水	木	金	土
土井 市川 森 田澤 種田 南 澤井	院長 土井 市川 西岡 山室 稲川	原藤 森 西岡 山室 岡田 森（栄） 南 澤井	市川 田澤 山室 畑 宮崎 中村	市川 森 西岡 岡田 畑 種田 森（栄） 塚本（か） 小島 山下	森 西岡 山室 狩野 亀山

調布市深大寺北町4-17-1

当院は「敷地内全面禁煙」です。

◎栄養課の
「当院のおすすめメニュー」は
休載です。

編集後記

日を追うごとに夏らしくなるこの頃、いかがお過ごしでしょうか。今回の『じんだい』は、長年にわたり吉祥寺病院にご尽力くださった小木先生の追悼号とさせていただきました。編集長の「吉祥寺病院でしか作れない追悼号にしたい」という思いのつまった内容になったのではないかと思っております。ご協力いただいた皆様ありがとうございました。

職員それぞれに小木先生との思い出があり、本当に偉大な先生だと改めて思いました。実は、私も小木先生との思い出がございます。恐縮ながらこちらに書かせていただきたいと思います。

私の母は介護福祉士として病院に勤めていたことがあります。いつも気さくに話しかけて下さる院長婦人である副院長先生が、ある日、「この本、是非、読んでみるといいわよ。介護にも役に立つと思うのよ」と小木先生の本をご紹介くださったそうです。

また、私は看護師なのですが、看護研究では現象学を用いることがあります。特に、大学で学んだモーリス・メルロー＝ポンティは印象に残っていました。その後、小木先生が『知覚の現象学』を翻訳されていたことを知りました。恐れおおいと思いつつも、小木先生にそのことをお話させていただいた際に、「ははは、そうなんだね。あれは、現象学の中でも、扱いやすい方かもしれないね。翻訳はね、ほんの遊びみたいなもので、そんなに大したことはやっていないんだよ」と仰いました。その先生のお姿に「実るほど頭を垂れる稲穂かな」を連想し、尊敬の念に堪えませんでした。

本追悼号を執筆している最中に、NHK Eテレテレにて小木先生の追悼番組「こころの時代アーカイブ　追悼　作家・加賀乙彦　信ずることの恵み」が放送されました。先生の教えを糧に精神科医療に携わっていきたいと思います。

マチルダ

吉祥寺病院では老若男女の医療人が、日々、患者様と向き合っています。今回、半世紀を当院で過ごされた小木先生を偲ぶ特集号の発刊に当たり、各位にご協力いただきました。貴重な写真や資料、それに大切な思い出をお寄せいただいた皆様、また21ページの挿絵にモデルとしてご登場いただいたS井先生、どうもありがとうございました。S井医師が手にしているのは、吉祥寺病院が舞台と言われる小木先生の著作『湿原』です。過去から現在、そして未来へ、病院を舞台に連綿と続く精神医療のさらなる飛躍に期待しつつ、医療文学に大きな足跡を残した小木先生の御国での平安を祈ります。

朱　暁